



シュライエルマッハーの美学と解釈学の研究

岡林 洋著 (大学文学部助教授)

行路社 4,000円

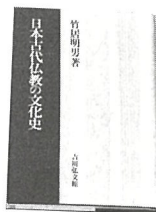
この研究が目指したものは、まず従来のロマン主義者シュライエルマッハーという固定された見方からその芸術論を解き放し、その思想の全体を見渡す総合的な視野から美学史における新たな位置付けを探ろうとしたものだと言える。

シュライエルマッハーの美学について、これまでもごく概説的な美学史的記述や、先行研究の一定の価値評価に基づいて書かれた論文は若干あるものの、本論文のように広範かつ多様な角度から思索を練り上げて構築された美学論文は、かつてなかったと言っても決して過言ではない。シュライエルマッハーの

美学、あるいは芸術論に関わる再評価といえ、クロチエの科学的発生論的視点、あるいはオーデブレヒトの現象学的美学の視点、そしてまたディルタイの解釈学的視点からの解釈がその代表的なものとして挙げることができるであろう。

シュライエルマッハーの美学芸術学的思想を、「美学」と「解釈学」にまたがるトータルな全体として捉え、そこに現代の「解釈学的美学」としての先駆的可能性を見出そうとしたこの研究はその構想において雄大であり、鋭い洞察によって貫かれていく。美学思想を取り扱った第一部の重厚な論述に比べると、解釈学を中心に論じた第二部は資料の取り扱いや読み込みにやや未消化なものが感じられる。しかしこれらの問題点も、美学史研究に新たな地平を開いた本論文の成果から見れば、ほとんど取るに足らないものであろう。

神林恒道 (大阪大学教授)



吉川弘文館 7,300円

日本古代仏教の文化史

竹居明男著 (大学文学部教授)

本書は、寺院と僧侶をめぐる長短十四編の論文から構成される。内容をキーワード風にあげると、寺院では吉野寺、元興寺、東大寺阿弥陀堂、初期神宮寺、室生寺、嘉祥寺、貞観寺、関寺、勝光明院宝蔵、蓮華王院宝蔵、僧侶では聖徳太子、道昌、明達、貞慶となる。このようにテーマは多様で、時代的にも大化前代から鎌倉時代前半におよび、古代仏教文化の全般にわたる魅力的な論考で満たされている。

これらの論考は、埋もれた寺院・僧侶の文献的発掘と復原を行うもの、寺院・僧侶から時代の歴史的事象を再検討するものに大別できる。例えば、前者に

は嘉祥寺、貞観寺の実態把握、勝光明院や蓮華王院の宝蔵内容品の追求という学界の共有財産となるべき成果がある。後者には、奈良時代浄土教の従来説に反省を迫り、平安初期の宗教意識を「物怪」を通して深層心理的に開いて見せたものなど、時代把握に欠かせない提言がある。

著者は序において、文化史の方法論や叙述は模索中であると控え目だが、この書を買っている方法論的基調は、史料を読むという歴史家にとっては当たり前の行為を極めて意識的に行っていることである。それは、史料の歴史的位置付けから問題に迫ろうとする手続きを引き出し、また文字史料に限らず美術作品等の意味を問うことから新たな史料としての解釈を試みていくなどの多角的な行為を産みだす。そしてこれらは、著者自身の史料との邂逅の意味を問うことに連なっている。

井上一稔 (奈良国立博物館主任研究官)



大巧社 1,200円

虫と日本文化

笠井昌昭著 (天文学部教授)

本書は、日本人の虫に対する独特の接し方、感情に着目し、その感情が日本文化にひとつの色合いを付与してきた事実を解明している。森浩一氏の企画になる「日本を知る」シリーズの一冊であるが、まさにシリーズにふさわしい内容といえよう。構成は、Ⅰ、虫と日本文化、Ⅱ、虫の文化史（Ⅰ章 銅鐸の絵／Ⅱ章 蚕／Ⅲ章 玉虫厨子／Ⅳ章 虫愛づる姫君／Ⅴ章 蟬／Ⅵ章 虫と江戸文化Ⅰ／Ⅶ章 虫と江戸文化Ⅱ）あとかきの各項から成っている。分析は多面的であるが、ヨーロッパ人と日本人の虫の音に対

する関心の相違の体験から始まり、多くの資料のなかから虫と日本人の深い共生関係が順を追って述べられる。論題は、銅鐸の絵から近代絵画にまで及んで広い。中国文化との関係についても、わが国に受け入れられていない「玉蟬」（墳墓に副葬される玉）を巡っての死生観念の彼我の相違、「長恨歌絵巻」を対象にした和歌に、もともと鳴いていなかった虫の音が詠みこまれる点に見られる彼我の相違の指摘など、含蓄が深い。

一読して、言いようのない懐かしさに包まれる。虫に対する感情は日本人特有のものだとする主張に納得する、というよりすでに共感しているのである。トンボ鉛筆にまつわる秘話、昆虫採集への没頭など、少年の日を回顧させる話題も豊富で楽しい。肩肘はらずに読まされて、自国の文化を省察することのできる一書である。

駒木 敏 (天文学部教授)



学生社 8,200円

西日本後期旧石器文化の研究

松藤和人著 (天文学部助教授)

著者は、日本の旧石器研究を終始リードしてきた研究者のひとりである。資料の蓄積のなかつた近畿地方の旧石器研究を立ち上げ、軌道に乗せた実績は学界の中でも広く知られており、これまでの研究成果を一冊にまとめられたのが本書である。

本書を一読されるとわかるが、著者の研究姿勢は終始一貫している。それは対象とする資料を明確に定義づけること、資料が分析に耐えうるだけの質的・量的な蓄積があること、これらの条件が満たされてこそ有意な解釈が可能であるということだ。第一章「二上山北麓の瀬

戸内技法」は著者の研究の出発点であり、遺物の詳細な観察と定量分析から製作工程の復元を試みたもので、現在なお不動の評価を受けているのは、厳密な資料の分析にもとづいた解釈の限界が十分に吟味されているからにほかならない。

著者の研究視点は地域的な研究の枠にとどまらない。第三章第五節「海を渡った旧石器」剥片尖頭器」では、九州一円に展開した剥片尖頭器を韓国スヤンゲ遺跡出土資料との比較からその出自を大陸側に求め、終章「西日本旧石器文化研究の回顧と展望」では、日本の石刃技法の成立を東アジアの視点から検討する。

今後の展望として、著者は東アジアの視点から日本の旧石器文化の評価と位置づけの重要性を説く。本書の上梓は、新たな研究段階に向けての基盤がようやく整ったことを告げている。

絹川一徳 (大阪市文化財協会)

古代探求

―森浩一70の疑問―

森浩一編著 (大学文学部教授)

中央公論社
3,200円

森浩一教授は考古学を専門とはされているが、それだけではあきतरらず、研究生活の比較の早い段階から「古代学」を提唱され、『古代学研究』という学術雑誌の初代編集長も務められて精力的にその理想に向って邁進されてきた。「古代学」とは考古学を核の一つとしつつも、過去を探究する際に役立つ分野の学問的成果を包括し、過去を構築するという壮大な学際的事業のことである。本書の執筆陣を御覧になればその多彩な顔ぶれに驚かれることだろう。それらの執筆陣を出会った順に並べると、森教授の「古代学」推進の歴史そのものといってもよい

もしれない。本書の題名も今は亡き小説家の松本清張氏の揮毫されたものに由来するそうである。本書の内容は森教授が今まで

に学問的に疑問をもった七十の項目に対して、執筆陣の中でもその分野に精通した一人がコンパクトに解答するという体裁をとっている。それらは七つのグループに分けられ、平均して一グループ七問となっているが、森教授が関心の高い二グループには十五問も割り当てられていることは興味深い。それらは「地域の歴史の復原」であり、「文献史料と考古学」である。いずれも森教授が最も力を注いできた分野である。

本書は高度に学問的な内容をもっているが、森教授が楽しみなながら取りこんできた課題であったことも関係してか、一般人にも親しみやすいものとなっている。ぜひ御一読をおすすめしたい。

青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所)

初期マルサス経済学
の研究

横山照樹著 (大学経済学部教授)



有斐閣 4,600円

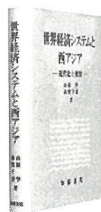
本書は、代表的な古典派経済学者の一人でありながら、これまで体系的に研究されることになかったトマス・ロバート・マルサスの経済学について、「人口論」(初版一七九八年)の各版の変遷から『経済学原理』(一八二〇年)に至るまでを、精緻な論証により明らかにしたものである。経済学者としてのマルサスに關しては、従来、人口学の見地から捉えようとする立場や、リカードウ経済学の比較としてのマルサス、あるいは神学思想(自然哲学)などの方面での研究はあるものの、本書のようなマルサス経済学の発展を把握でき

る業績ではなかった。

本書は、マルサスがスミスの最適な経済発展のための「自然的な資本投下の順序」論を継承しつつも、農業保護政策という具体的な方策によって、英国が農業工業均衡型経済システムとして繁栄の道をたどりうる新たな経済像を明示した。同時にリカードウの理論・政策に対するマルサスのそれが、農業を含むすべての生産物とサービスが円滑に消費と生産を保つような最適な経済構造(有効需要に裏付けられた「生産的労働と個人サービス労働」、あるいは公共事業と課税との間の最適割合)の基礎理論となりうるであろう。

本書は、スミスやリカードウに対して、十分に対峙できるマルサスによる新たな古典派経済学像を描き出し、経済理論史におけるマルサス経済学の独自性について、新境地を開いた論考として高い評価が与えられるであろう。

西岡幹雄(大学経済学部教授)



知碩書院 3,500円

世界経済システムと西アジア―近代化と変容― 山根 学

(大学商学部教授) ほか著

本書は近年話題の多い東アジアでなく、パレスチナやイラク問題などで知られる西アジア、すなわち中東の経済を対象にした数少ない貴重な文献である。

叙述対象となった諸国は、経済発展に必要な資金の不足に悩むエジプト、シリア、ヨルダン、レバノン。資金は多いが人口も多く経済発展に行き詰まっているイラク、イラン。人口が少なく豊かなサウジアラビア、クウェート。そして、この地域に戦後新たに誕生したイスラエルである。したがって、中東地域全体がほぼ分かるようになってい

はあるが、その発展に大きな影響を与えている政治や宗教、種族主義などが随時取り上げられ、時にはこれらが経済的要因以上に重要な影響を与えていることが明らかにされている。

さらに冷戦体制下で中東地域が米ソの勢力の維持・拡張の舞台となったこと、その戦略が主として石油とパレスチナ問題を介してそれぞれの諸国に大きな影響を及ぼしたことを世界システムとの関係のなかでとらえようとしている。

特に本書の特徴は、東アジアの発展や先進工業国の発展をあわせ鏡に工業化や近代化の要因を抽出し、それを中東の諸国に当てはめてなぜ彼らが発展の道を歩むことができなかったかの理由を探ろうと試みていることであろう。ここが単なる中東諸国の紹介に留まらず、もっと大きな視野に立った発展途上国論として評価したい。

西村 理 (大学経済学部教授)



岩波書店 7,600円

財閥経営の歴史的探究―所有と経営の国際比較― 安岡重明著

(大学商学部教授)

本書は財閥の生成と発展のプロセスの解明を主題として、それを「所有と経営の国際比較」というパースペクティブから論じた独創的な論集である。『財閥形成史の研究』(一九七〇年)以来待ち望まれていた著者の経営史研究の第二の金字塔となるであろう。本書は私にとっては経営史研究の座標軸であるのみならず、「パンドラの箱」でもある。私の研究の準拠枠を変革したからである。私の研究はもっぱら財閥経営者のライフ・ヒストリーの企業者史的分析に重点が置かれてきた。それ以外の研究領域に侵入せねばならない理論的

根拠も正当性も見出すことができなかったからである。

ところが、本書の核となるいくつかの論考との遭遇によって、それまで私が何の反省もなしに進めてきた方法論が根底から覆された。財閥の経営者のライフ・ヒストリーの分析はまず第一に所有者(家長やその家に固有の制度・慣習、そして国家の所有制度など)との関係のなかでなされねばならないということ、さらには私の企業者史的研究に安岡史学の基盤を構成している「総有」を中心とする諸々の概念や理論を取り込まなければ、私の研究そのものが実証主義との接点を見失い、いたずらに歴史的現実の大海原を漂流するだけになってしまうということ、以上の二点を思い知らされるにいたったのである。研究者はすべからずこの「パンドラの箱」を開き、「自己否定と希望の実」をつかみ取らねばならない。

瀬岡 誠 (大阪学院大学国際学部教授)

異文化交流と近代化―京都国際セミナー

一九九六―

伊藤彌彦（大学法文学部教授）

沖田行司（大学文学部教授）

吉田 亮（大学文学部助教授）

ほか執筆

本書は、国立音楽大学の創立七十周年記念事業として企画され、同志社大学人文科学研究所など諸研究機関が協力して新島会館で実施された「京都国際セミナー一九九六」の記録集である。「異文化交流と近代化」の表題のもとに、十九世紀の東アジアにおいて、西洋音楽の受容、キリスト教文化、外国語、女子教育の導入の諸側面、およびその事業にかかわった宣教師、お雇外国人教師などの役割に関する検討を中心とした数多くの報告によって構成されている。本



大空社
8,000円

書の庄巻は日本だけでなく欧米諸国、中国、韓国などの多彩な研究者が、多種多様な報告を担当している点に見出される。わが国での「異文化交流」に関する研究は、往々にして西洋文化の日本への受容という側面のみ限定されがちになるが、本書は、「漢字文化圏における近代音楽の成立」というテーマに代表されるように、東アジア文化圏における西洋文化の受容の多様性と相互の比較という視角が生かされており、貴重である。「文明の衝突」(S・ハンチントン)を必然の成り行きかのように語る言説がセンセーショナルに唱えられる中で、「異文化交流」を通じての相互理解こそが、二十世紀に向かつての本道でなければならぬと考えている人々にとつて、本書は、いろいろなアイデアを汲み取ることでできる、実に興味深いテーマに溢れた著書である。

出原政雄（大学法文学部嘱託講師）

ドイツ・エリート養成の社会史―ギムナジウムとアビトゥーアの世界

望田幸男著（大学文学部教授）



ミネルヴァ書房
3,500円

昨今、教育改革論議が喧しい。その難点は、戦後教育をどのようにに見直すのか、その新たな方向性が見出せないことにあると見受けられる。

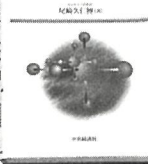
本書は、十九世紀から今日に至るドイツのエリート養成を軸に、教育の歴史を社会的に考察した専門研究書であるが、教育史をその理念や制度的側面からのみ追うのではなく、教育全体が実際には社会の構造といかに不可分であるかを解明している点で、今日の日本にとつても示唆に富むものとなっている。

ドイツにおいて大卒エリート

となるためには、ラテン語・ギリシア語の習得が不可欠であった。そしてギムナジウムが大学進学への特権的な位置を占めると、人文主義的古典語教育も不動の地位を築くことになる。時代とともに制度上はギムナジウムの優位が崩れてゆくことになるが、しかし古典語をもとにした「文化資本」が世代間に伝達されることで、教育を軸にした社会階層が再生産される結果となってしまう。戦後のドイツは学生数の増大という方向で教育と社会の民主化を推し進めようとしてきた。ところが、学生数は増大しても社会階層ごとの進学実績には違いが見られるという。民主化というスローガンのもとに改革が推し進められながら、社会階層は確実に再生産されているわけである。このことは、日本における戦後の教育制度への重々しい問いかけでもあると見るべきであろう。

吉門昌宏（大学文学部嘱託講師）

流通パートナーシップ論



中央経済社
3,000円

流通パートナーシップ論

尾崎久仁博著 天学商学部助教授

流通論の分野では、八十年代以降、「戦略提携」や「パートナーシップ」など、企業間の連携が喧伝されている。この現象を扱ったものの多くは単なる時論の域を出るものではなかったが、本書はこれを「マーケティングにおけるチャネル研究」として取り扱う（二頁）とともに、「従来のチャネル論を再検討し、その弱点を補強する」（二二頁）という野心の下に書かれている。本書についてはすでに『同志社商学』第五十巻第一・二号に紹介されているので、ここでは屋上屋を架すことを避け、以下、評者の率直な感想を申し述べ、責

の一端を果たすこととしたい。（一）「パートナーシップ」（以下、PSと略記）の概念規定が第二部第五章に初めて登場するが、PSという用語はすでに第一部にも出ているので、むしろ本書の冒頭に持ってくる方がよかったのではないか。

（二）問題の流通系列化をPSの一種と見ることはできないだろうか。すなわち、PSを①製造業者優位のもの、②流通業者優位のもの、③両者対等のものに分けた場合、流通系列化は①となるであろう。なお③は当事者間に規模格差がある以上、「不安定」とみるより元々一時的なケースとみるべきではないか。

（三）伝統的なチャネル論の再検討とか弱点補強という限りは、むしろPSの出現によって製造業者や卸売業者のチャネルがいかに変容してきたかが問われねばならなかったのではないか。今後の展開が鶴首される。

光澤滋朗（大学商学部教授）

京都滋賀 鉄道の歴史

田中真人（天学人文科学研究所教授）



京都新聞社
2,800円

ほか著

本書は、鉄道史学会につどう関西の研究者三人によって執筆されたものである。そのうち、田中氏は本学人文科学研究所教授であり、日本近現代の政治史を専門にしながら、鉄道への関心と深い造詣は専門家以上のもので、今回、鉄道史関係として待望の著作を上梓された。

本書は、京都・滋賀地域において、過去に敷設された鉄道を、計画のみに終わった幻の鉄道も含めて網羅し、その変遷を、三人がその専門的持ち味を発揮しながら、分担執筆したものである。「あとがき」でも述べられているように、本書は「鉄道を通

じて地域社会の歴史を見ていくという試み」を意図したもので、いわば「鉄道に見る地域社会史」の叙述を意欲的にめざしたものである。この点、伏見酒造業と陸軍第十六師団とのそれぞれの利害・思惑から敷設計画が決定されてくるくだりを描いた奈良電車、丹後ちりめんからニッケル鉱山への地域産業の変化によって、その役割を変化させていく加悦鉄道、明治維新、

東京奠都、文明開化という文脈のなかで敷設されてくる官設京阪間鉄道（東海道線の一部）など、その意図に合致し、興味深く読ませていただいた。私的な関心からいえば、京都電気鉄道と市電を扱った第七章「日本最初の路面電車」や現在の阪急京都線にあたる鉄道敷設を扱った第十四章「小林一三の宿願が実った新京阪電鉄」など、自分で地図を広げ略年表をつけながら読むことができた。

西村 卓（大学経済学部教授）

泉鏡花文学の成立

田中勲儀著（大学文学部教授）



本書は新たに書下ろされた三本を含め、全体が三部によって構成されている。一部は鏡花の文学的出発期について、二部は「葉草取」（明治36）から「南地心中」（明治45）まで、三部は大正期から晩年の「雪柳」（昭和12）までを対象として、作品が成立するまでのプロセスを丹念に跡づけた、本格的な鏡花研究の書である。あとがきで述べられるように、文学研究の基礎的作業、初出誌に遡った書誌的調査、同時代評から研究史の整理、本文異同の分析、成立事情の検討などがこれほど徹底して行われることは少ない。田中氏の資料博搜の才能がいかに発揮され

た好著であり、文学研究において解釈だけに頼ることの危うさを指摘する論調には充分の説得力がある。たとえば、「祇園物語」の舞台となった鴨川疎水や竹村屋橋について郷土史家の文献から当時の新聞記事まで幅広く渉猟することによって運河の開門という、どちらかといえば近代の象徴であるかのような事物が、実は「賑やかな花街の一隅に大きな口を開けた暗黒の魔所」として描かれていることを明らかにしていく手際は鮮やかであるし、あるいは「薄紅梅」のモデルになった人々を発掘していくことが同時にそれについて証言する鏡花の友人関係を浮び上がらせ、鏡花の実在感が高められ、またともすれば観念的にとらえることになりがちな〈明治〉を彷彿とさせてくれる。鏡花研究者にとつてだけではないだろう喜びを与えてくれる本である。

高桑法子（女子大学文学部助教授）

百人一首への招待

吉海直人著（女子大学文学部助教授）



平易な文章で説かれた一般読書人向け新書版であるが、内容は重い。百人一首悉皆研究を志し斯学の最先端を歩み続ける著者ならではの、専門家にとつても有益な好著である。

まず、百人一首との成立先後関係が学界の課題となっている百人秀歌の解説が見事。この文献資料の発見者有吉保氏と並び、百人秀歌型配列異本百人一首の発掘者として研究史上確固たる地位を占める著者は、この異本類を秀歌から一首への過渡期本と見做す正当な知見に基づき、他の諸要素をも勘案した上で秀歌→一首の方向を示唆し、説得性に富む。次に、小倉色紙をめぐる解説も魅力的。料紙三

種類、三百枚染筆の仮説的主張もさることながら、上述した秀歌と一首の関係をも視界に入れ、作者表記を欠くこと、似せ絵の有無、二つの小倉山荘問題、などと関連させての推論を展開する手腕が、鮮やかである。さらに、百首各歌の評釈が独創的で秀抜。古注釈研究の第一人者として広範な目配りができ、また用例調査など厳密な学問的手続きをも重視する著者の面目躍如たる成果である。その他、百人一首の再利用と見る、かるた競技などにも及ぶ多面的解説は、日本文化史面への有意義な発展的考察であろう。

また、定家自身の人間的ありようや右筆の活動実態などをめぐる今後の研究進展に伴い、百人一首関係資料の全面的見直しも必要かと説く、いわば読者をも主体的研究へと誘う、招待者としての執筆姿勢にも敬服したい。

上條彰次（神戸松蔭女子学院大学教授）